

十勝の事前学習資料



帯広ファームトリップ推進協議会

1、十勝とは

十勝は北海道の南東部に位置する十勝地方は全部で19市町村から成り立っており北海道全体の約13%の面積を占めています。

この市町村の合計面積は東京・千葉・埼玉の合計に匹敵する1万831 km²、広大な平野に「十勝晴れ」と呼ばれる青空がひろがる農業の盛んな地域です。

大規模農業が一般的で、畑作では一戸当たりの平均耕地面積は東京ドームおよそ8個分です。これらの畑で作られる主な作物は、じゃが芋・甜菜（砂糖の原料）・小麦・豆類です。また酪農も盛んで、牛乳乳製品も一大特産品です。最近では、畜産も盛んで、乳牛と肉牛の頭数を合わせると十勝地方の総人口を超えるほどになります。海岸沿いでは、ししゃもなどの水産物の漁獲にも恵まれています。このように「食」に恵まれた十勝は、食糧自給率1200%を誇り、「食」を支える日本最大の食糧基地になっています。

十勝 D A T A (2018年)

面積：10,831.62 km²

人口：341,084人

牛の飼育頭数：456,676頭

農家戸数：5544戸

平均耕作面積：41,6ha



2、十勝の歴史

「十勝」という地名は、管内を流れる十勝川をさすアイヌ語「トカプチ」からといわれています。意味については「乳房・ある処」「幽霊」「枯れる」などいくつかの説が存在しています。

蝦夷地(北海道)には先住民のアイヌの人々が独自の文化を築いていました。江戸時代に入ると和人が漁場確保やアイヌの人々との交易のために入り、沿岸全域に広がりしました。

十勝へは寛政12(1800)年に皆川周太夫が帯広に足を踏み入れ、内陸部の様子を記録に残しました。

続いて安政5(1858)年には松浦武四郎がアイヌの人々の道案内で詳しく調査し、将来有望な地であることを「十勝日誌」で紹介しました。

明治2年(1869)、蝦夷地は北海道と改称され、十勝国(現在のほぼ十勝支庁域)を創設。帯広の前身の河西郡下帯広村が誕生しました。

十勝の本格的な開拓は、明治16(1883)年5月に依田勉三の率いる「晩成社(明治15年1月、現在の静岡県松崎町で結成)」一行27人が、下帯広村に入植したことから始まりました。

彼らは度重なる冷害やバッタ、ノネズミの襲来など苦難続きで事業としては失敗に終わりましたが、その後の十勝の産業に大きな功績を残しました。

十勝の開拓は、北海道に多く見られる官主導の屯田兵によるものではなく、晩成社をはじめ、富山、岐阜など本州からの民間の開拓移民により進められたことが特徴です。

3、十勝の農業

依田勉三の開拓以来、寒冷な気候条件や土の質は決して作物を作る環境としては良くない状況にありながらも、先人の苦労や努力、近代技術の導入、土地基盤整備を進め、今日では日本最大の食糧基地として発展しました。

現在は恵まれた土地資源を生かし、大規模で機械化された生産性の高い農業が展開される中、経営規模の拡大に伴う労働力不足や後継者不足が問題となっています。

また食の安全・安心に対する消費者の関心の高まり、更には市場のグローバル化加速する中で農業を取り巻く情勢は大きく変化しています。

このような状況の中、日本中の消費者に安全で高品質な食糧を安定的に供給し豊かな農村環境を維持していくための生産者はじめ農業団体一丸となり取り組みを進めています。

農業生産の概要（畑作）

雨が少なく、寒暖の差が大きい気候を生かし、小麦、ジャガイモ、てん菜、豆類の4品を中心とした「輪作」で大規模な畑作経営が展開されている。また、トウモロコシ、長いも、ニンジンなどの地域の特産も栽培している。

農業生産の概要（酪農）

酪農は畑作と共に十勝農業を代表する存在で、飼養戸数、飼養頭数共に全道一を誇っています。農業の高齢化により飼育頭数は年々減少していますが、一経営あたりの頭数は増加しています。また搾乳ロボットの導入などの省力化も進んでいます。

4、十勝に関する情報リンク集

●十勝に関する情報は下記から詳細を知ることが出来ます。

十勝総合振興局

<http://www.tokachi.pref.hokkaido.lg.jp/>

十勝観光連盟

http://tokachibare.jp/about_tokachi/

帯広市ホームページ

<http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/>